

## 死んだ我が子の命に意味を持たせること

美馬達夫・医師

ゆきさんの「乃木坂スクール」には、どうしても赤坂の教室まで行って、講師の先生と同じ空間に居て、直接語られる授業を受けたいと強く思う授業があります。勝村先生は、その一人でしたし、実際に教室で直接講義を受けることは、予め事前資料で全てを知っているつもりと格段の差がありました。勝村先生が伝えたいと思う、強弱のメリハリがすごく、こちらに知識以上のものが伝わってきた気がします。

私の実家は徳島です。1987年と思いますが、美馬の本家で、娘さんがお産で東京から里帰りし、徳島県立中央病院で赤ん坊が誕生という喜ばしい瞬間をまだかまだかと待っていました。ところが、その瞬間、母子共々の急死という最悪の悲劇に暗転しました。その時、父が「どうせ、あの女医が早く帰宅したいから陣痛促進剤を使ったんやろう」とすぐに反応したのが意外でした。父は裁判をして明らかにしたいと息巻いていましたが、亡くなった娘の母親の弟が徳島県知事だったことなど、世間体も気にして、本家は真相を究明する手段に訴えませんでした。

今回の授業を受けるまで、私は陣痛促進剤の問題はとっくに解決済みだと思っていました。ところが、1974年には危険性に気づいていながら、1992年にやっと添付文書が改定され、さらに2010年6月1日まで待つて本質的な添付文書の改定に至り、しかも、その改定は勝村先生が尽力して勝ち取った2010年4月の「診療明細書の全患者への無料発行」があったからだったとは！

この8月に私の娘が出産しました。「計画分娩で陣痛促進剤を使う」と聞いて驚きました。コロナ禍でベッドの運用が困難なので「今だけの必要悪」か考えていましたが、今回の講義で、そうではなく、今も同じように陣痛促進剤をつかった「不自然でリスクのある出産」が全国で横行していることを知り、ゾッとしました。

「助産所での時間別出生数」のグラフは私も好きです。おおらかな潮の満ち千きのような自然のリズムが伝わってきます。出産はこうあるべきです。勝村先生は、かつての腕の立つ助産師の技量が継承されず途絶えていく、病院中心の出産という今の歪な制度を根底から批判していることに感服します。また、勝村先生は、このままでは立ち行かなくなる医療保健制度を、国民の立場から、費用対効果なども考慮しながら、グランドデザインを作っていこ

うとする大きな視野をもっておられ、しかも「診療明細書の全患者への無料発行」がその役割の一端を担うであろうことも見通していることに驚きました。

今日、動画配信の講義を視聴しました。リアルな講義の時にもハツとした部分なのですが、再度出会ったことで「やはり勝村先生のこの発言はスゴイな」と、心の奥を刺さされた思いがしたので、聞き書きして、レポートを終わることにします。

勝村先生、ありがとうございました。

——「患者(広義)」の4つの視点」での発言——

なんで被害者は一番真剣に考えるかと言うと、それしかやることがないからなんですよ。ぼくも子どもが死んでしまって、自分が生きていかなきゃならないのかって、エネルギーが出てこない時に、ひとつだけエネルギーが出る方法が見つかったわけです。

自分の子どもは死んでしまったけど、そのことによって、それ以後、こんな子どもが死ななくなっただっていうことができたなら、自分の子どもの命に意味を持たせることができる。自分の子どもの命に意味を持たせるためにやっていこうと思った時に、ああ、だから原爆の被害者や、沖縄の戦争の被害者の家族・遺族は語り部を続けているのだと、やっと分かった。

——\*★\*——

美馬達夫様、ゆきさま

お世話になります。

とても素敵なレポートをお送りいただき、ありがとうございました。

私以上に、私の思いをわかりやすく整理していただいているように感じ、ずっと保存しておきたい内容でした。わずかな時間で、素晴らしい理解者と出会うことができたこと、本当に感激いたしました。

医師のお立場から、そして、ご実家での経験なども合わせて読ませていただき、とても勉強にもなりました。

ゆきさんの大学院で、このような出会いや交流をいただけたことにあらためて感謝いたします。

美馬先生からは、わたしこそ、色々とお話をお聞かせいただけて勉強したいという思いになりました。

ご活躍を祈念しますと共に、引き続き、よろしく申し上げます。

ありがとうございました！

\*\*\*\*\*

勝村久司